

齋藤貢詩集『夕焼け売り』抄

夕焼けについて

不意を打たれて
身構えることすら
できなかつた、と。

背後から振り下ろ
された刃で
深い傷を負った
ひとよ。

暮らしを置き去り
にして

あられのような息
を吐きながら
ひととは暮らして
いる。

弔いの列車は

小さい火を点し
ながら
奪われてしまつた
一日を西の空へ
と運ぶ。

車窓に幾たび、夕
日が沈んだこと
だろう。

列車は、沈む夕日
のかけらを拾い
集め

悲しみは、息を吹
きかけて西の空
で燃やそうとし
ている。

あの日からは、こ
の世には痛みも
、悲しみもない。

怒りや憎らしたは
らわ袋に詰めに
こまれて

町舎に至るところ
に放置された。

黒い袋を、出たさ
ん刻を待たせて
いる。

片道切符を持って
改札口に入った
のは

津波にのみまられ
て帰らぬひと
だろ

ホム動を始めて
ふわりと

列車は、西の空
で燃えてしま
うと

苦しみにあか
らか

あまつかは、少
しだけ遠く
いて

耳を澄ますと、
死んだひと
の魂のよう

ひゆの汽笛は、
と、

ふるさとは、
火に包ま
れて

今も、夕焼けの
ように燃
えている
の

だろうか。

あの日、しんしんと雪が降って
海も、吹き荒れていて
強風も、漏らした最期のひと言。
凍えながら、頭から離れない。
悔しいと、このことばが
抜け出すと、頭から離れない。

燃えていながら／寒い火というものがある*

この詩人の目にも、末期の火が青白く見えていたのだろう。

火が、ほんとうに寒くない火だったからだ。

それが、ほんとうに寒くない火だったからだ。

少し俯つむ、ゆつくりと目を閉じる。
その世は、舌の触りも、昔のまに立ち上がるのだが
ひとは、舌の触りも、昔のまに立ち上がるのだが
あなちの火は、舌の触りも、昔のまに立ち上がるのだが
いなのちの火は、舌の触りも、昔のまに立ち上がるのだが

今も、行方知らずの具で引っ掻く。

あの日、炎空に欠けて
その日も、炎空に欠けて
寒火に包まれた故郷の景色であることか。

* 二谷晃一詩集『野犬捕獲人』より

草のひと

あゝ世界の縁が突然に欠けて

こらえきれずにあふれる波となった。

ちぎれた空から落ちてくる水。

避難せよ。直ちに、避難せよ。

土に生きた草のひとは、迷っている。

どのようすればよいかもわからぬまま
幾度も、幾度も、山を越えたり、川を渡った。

草の土地の根は、千々に乱れている。

かたが、ここに無数の蕨がならび
集木は、よやかに日々にたはすな。

触れ、放りたすまはすな。
朽ち、放りたすまはすな。
夕焼けるよ、放りたすまはすな。

あの日から、頭うべをたれて戻ってくるが
死んだら、嘆かやせない。満ちて

だつたら、草のよ。

もつと、安らかに眠るためには
声を荒げて、何を言わねばならぬ。
汚れた土を置き去りにして、無防備に
この地を置き去りにしているのは、
いったい誰か、と。

その無念を、ひとよ。

喘ぎ声で、い。ひとよ。
限りなく遠くまで語り続けるように

草の聲や地の聲が、
遠くまで、死んだひとの魂を鎮めるまで。

桃色の舌を垂らして

毛皮の身を包み、地をさまよう。
おれは、愚かな一族の末裔である。

嗅覚は鋭くなつた。
足腰も衰えては、
敵を、瞬時に嗅ぎ分け、
捕獲する。こともできる。

涎を垂らし、牙をむく
無頼な野生も、
どろろは身についてきた。

桃色の舌で、滅びの味覚を
死戯れで、愛でながら

おいのちの快楽。れ端をひと息に呑み込むのが
おれは、罪深いことだろうか。

けもの快楽に身を委ねて
野蠻なおれを、生きる。

けものおれには、日常がある。

牙をさくから、どこの誰だつたか。
殺すてくれたのは、
教える野蠻は、むかなくとも

文と、野牙をむかなくとも
けつ、殺戮をやめないだろう。

愚かなけものだ、おれたちは。
その先に、いのちの未来がある。と信じている。

愚かな末裔だ、おれたちは。
けもの毛皮で身を包み、荒い息で涎を垂らしながら。

桃色の舌が、ヒリヒリと焼けるように痛い。
決して抜かぬ棘のようかぬ悔恨のようかぬ。

二度ととりかえしにつかぬ悔恨のようかぬ。